



杏奴



茉莉



志げ



喜美子

目次● 巻頭コラム「明治の向島一鷗外と歩く」岡戸敏幸(早稲田大学非常勤講師)／展示会場から／地域情報／開催中の展覧会／論考「大正四、五年の森鷗外一転生への渴望」小泉浩一郎(東海大学名誉教授・森鷗外記念会会長)／次回展示のお知らせ 特別展「私がわたしであること—森家の女性たち 喜美子、志げ、茉莉、杏奴—」／活動報告／これからの催しもの／カフェ便り／主な寄贈図書一覧／編集後記

明治の向島 — 鷗外と歩く —

岡戸敏幸 (早稲田大学非常勤講師)

時は移ろい人は変わっても、地面は過去とつながっている—そのことに気付くと、見ぬ世に生きた人びとに血が通ってくる。歴史を学ぶ醍醐味はここにあるのだろう。

鷗外は、史伝『浪江抽齋』(大正五・一九一六)に、こう書いています。

「わたくしは幼い時向島小梅村に住んでいた。初の家は今須崎町になり、後の家は今小梅町になっている。その後の家から土手へ往くには、いつも常泉寺の裏から水戸邸の北のはずれに出た」(その十)。

鷗外の住んだあとを訪ねてみると、今は、都立本所高等学校前の歩道に「森鷗外住居跡」の解説板が立っているばかりである。近くに「森鷗外住居跡」というバス停があるのも微笑を誘う。解説板の前からは、ビルに遮られて東京スカイツリーこそ見えないが、江戸明治の空気が淡く、荷風の「向嶋も今では飄箆を下げた風流人の杖を曳く処ではなく、自動車も飛して工場の製作物を見に行く処である」(「向島 昭和三十三年」)との言葉が俵つまでもない。常泉寺はコンクリート造りの現代的な姿に変わってしまった。ここから、鷗外の住んだ明治初年の向島を思い浮かべるには、知と情の力が必要となる。

明治五年、十歳の鷗外が見た向島とはどのような場所であったのか。それはまだ江戸の文化のなかにあった。旧暦が廃されるのもこの年十一月のことであったから、時の流れも江戸のままであったろう。社会の枠組みが文化に影響を与えるのは当然であるにしても、政治上の時代区分をそのまま文化のそれに当てはめるのは必ずしも正しいばかりでない。江戸に生まれた人びとが、明治の世にもたくさん生きていたという事実は重い。

江戸時代、向島は文人墨客清遊の地であった。浅草寺の喧騒から隅田川を隔てただけで世離れた気分が漂う。墨堤の雪月花、それぞれの眺めに遊ぶ風流は、浮世絵恰好の画題となった。北斎でも、広重でも、その作品に当時の姿を探ることはさほど難しくない。

「道」の記憶は強固である。震災戦災を経て、街の姿は変わって根は残る。鷗外の供をして少し向島を歩いてみよう。

少年鷗外は、依田学海(天保四・一八三三〜明治四二・一九〇九)に漢学の指導を受けていた。学海は、漢学者、劇作家。

明治期の演劇改良運動の中心を担ったことで知られるが、鷗外が教えを受けた頃は、明治政府の高官であった。鷗外の家からは、いまの桜橋通りを墨田川に向かって行き、水戸街道を右に折れたら左手二本めの細い道を直進する。ほどなくして区立言問小学校にいたれば、そこが学海の旧居跡である。ここまで少年の足ならば十分ほどであろうか。思いの外、近い距離である。数えて三十歳違いの二人が、どんな話をしてきたのか、思うだけで心が躍る。ここで、学海の著書『学海画夢』(明治十八・一八八五)から、「墨水暎桜園(芳川笛師画)を掲げておこう。学海は、余、墨水勝景を愛す。花時毎に遊賞すること数次」(原漢文と書きはじめて、桜への愛情を吐露している)。

この場所には、墨田川の桜にとつて恩人ともいべき人物も居を構えていた。成島柳北(天保八・一八三七〜明治一七・一八八四)である。柳北は、幕末明治の漢詩人・新聞記者。江戸幕府の騎兵頭、外国奉行等を歴任し、大政奉還後は、「天地無用の人」を称して、「朝野新聞」、「花月新誌」に拠って健筆を揮った。柳北は最晩年、徳川家綱以来の歴史をもつ墨堤の桜を未来の人びとへと長く残すため、大倉喜八郎(天保八・一八三七〜昭和三・一九二八)らと白鷗社を結成した。その意思が実り、一千の桜樹が植えられたのは柳北没後であったが、その功績は「墨堤植桜之碑」(明治二十)に刻まれ、言問団子舗の前に建てられている。桜の命は存外に短い。柳北らの温かな情があつたからこそ、今も私たちは桜を愉しむことができる。

鷗外は、『浪江抽齋』のなかで、抽齋の痘科の師、池田京水(天明七・一七八七〜天保七・一八三六)の墓を探索したことを細かに記している。嶺松寺を探した件には次のようにある。「わたくしは再び向島へ往った。そして新小梅町、小梅町、須崎町の間を徘徊して捜索したが、嶺松寺という寺はない。わたくしは絶望して踵を旋したが、道のついでなので、須崎町弘福寺にある先考の墓に詣でた」(その十)。

鷗外の家から弘福寺までは、桜橋通りを見番通りまで一直線に歩いて五分ほど。鷗外にとっては庭のようなものであつたらう。弘福寺は黄檗宗の禅寺、中国明代建築の姿を伝える山門や大雄宝殿が印象深い寺である。境内には風外禪師が刻んだ「翁媪尊」の石造が祀られ、咳や口中の病に御利益があると信仰されている。向かつて左の二回りも大きな方が壘である。

ここまで歩いてくると、江戸明治の薫りが少しずつ濃くなってゆく。見番通りを左に行けば、三閭神社、右に行けば長命寺である。三閭神社は、江戸以来、風雅の地として殊に名高く、たくさんの絵に描かれ、詩歌に詠まれた。彼ら文人墨客の夢は、本殿を囲むように林立する碑に留められている。榎本其角(寛文元・一六六一〜宝永四・一七〇七)の雨乞いの句碑や朱楽菅江(元文五・一七四〇〜寛政二二・一八〇〇)の辞世狂歌碑など、多くの名碑は、私たちが江戸の世に誘ってくれる。長命寺にもいくつもの碑が残るが、ここでは、「鼠取養犬六助塚」(明治二十)を紹介したい。六助は北新川の酒問屋某の飼犬であった。この犬には鼠を捕るという奇技があり、六助に遇った鼠は概ね死を免れなかったという。「其の軽捷猫に数等勝る」(原漢文)を以て「鼠取六助の号があつた。しかし、不幸にも犬獲りの手に斃れ、その死を悲しみ魂を慰めるために有縁の者が資を募つてこの碑を建てた」と、愛犬居士が書いている。碑を負う六助の姿、その円らな顔が愛らしい。鷗外も六助の頭を撫でたのだろうか。



『学海画夢』(個人蔵)

展示会場から

小金井喜美子翻訳原稿『ゆく春』

[100157]



森鷗外の妹である小金井喜美子(1870-1956)は、『子の病』、『太鼓の音』、『鷗外の思ひ出』(回想集)等の作品で、女流作家として知られていますが、喜美子の文筆活動のきっかけとなったのは、それを20年ほど遡る明治20年代に始められた外国文学の翻訳でした。人類学者・小金井良精と結婚した翌年の明治22(1889)年2月、『日本之女学』にドーデ原作の翻訳小説『星』を8月には鷗外や落合直文等の共訳詩集『於母影』に、『わが星』(ホフマン作)等の翻訳詩を発表しました。喜美子が手掛けた翻訳は、同年から25(1892)年までの4年間に絞って見ても、実に20作品ほどになります。なかでも、文語体で翻訳した『聊齋志異』の『皮一重』(「しがらみ草紙」掲載)は、石橋忍月によって絶賛され、若松賤子と並ぶ「閨秀の二妙」として注目を集めるようになりました。

喜美子の文筆活動は、鷗外の勧めによって始められ、その励ましによって支えられていました。書くことは、婚家に仕え、また二男二女の母として育児をこなす苦悩や不満を解消することにつながっていたのです。当館所蔵の書簡、日記の中にも、創作、翻訳にあたっての具体的な指示を鷗外に仰いだり、家事に追われ、筆をとれない焦りを相談するといった内容のものが散見されます。

今回紹介する資料は、オシップ・シュービン(1854-1934)作『Toter Erbkling』(死したる春)の翻訳原稿『ゆく春』です。喜美子によって、明治30(1897)、8年頃、手掛けられたと推測されます。イギリスの破産貴族が画家になり、パリに行き、そこでイタリア人モデルと出会う……その二人の間の恋が描かれています。シュービンは、本名をアロイジア・キルシュナーというボヘミア系ドイツ人の女性作家で、28歳で最初の長編小説『名譽』を発表して以来、45を超える小説を書き、15ヶ国語で80冊もの翻訳が出版されるほどの当時としてはベストセラー作家でした。鷗外が、その原作『埋木』を翻訳したことも知られています。

『ゆく春』の翻訳を喜美子に勧めたのもまた、鷗外でした。「新書月刊」(明治30年11月)掲載の『作家苦心談十二』において語ったその経緯は、興味深いものです。鷗外がドイツ留学中から構想し、帰国後に発表した『うたかたの記』(明治23年、「しがらみ草紙」掲載)が、シュービン作『Toter Erbkling』、その趣向が大変似ているというのです。ただ、シュービンの作品は、『うたかたの記』が発表された後に刊行されました。鷗外自身も、この一件を「実に不思議なこと」と振り返り、妹・喜美子に翻訳を勧めたといっています。喜美子自筆の翻訳原稿『ゆく春』の巻頭にも、こうした経緯が記録されています。本資料は、春の特別展にて、女性翻訳家の先駆として活躍した喜美子の作品のひとつとして展示します。

地域情報

文京つつじまつり

2016年 4月9日(土)〜5月5日(木・祝)

毎年春に根津神社で開催されている文京つつじまつりは、「文京花の五大まつり」のひとつに数えられます。根津神社境内には約2000坪のつつじ苑があり、苑内には約100種3000株のつつじが植えられています。

宝永2(1705)年、5代将軍綱吉が、兄である綱重の子綱豊(6代家宣)を養子にした際に、屋敷地を根津神社に奉納して大造営を行いました。綱重が屋敷庭園につつじを植えていたことから、奉納後も境内につつじ苑が設けられました。当時7000坪あったという境内の庭園は「つつじヶ岡」と呼ばれ、府内の名勝だったそうです。



見頃を迎える4月中旬から下旬頃には、色も大きさも異なる花々が苑内を彩ります。品種ごとに開花時期が異なるため、

約1か月もの間つつじを楽しむことができます。また、期間中は甘酒茶屋や植木市、露店等も出店されています。つつじまつりに合わせて、当館では特別展「私わたしであること」も始まりま

写真提供：根津神社

開催中の展覧会

コレクション展

1915-1916

100年前の鷗外とその時代



写真「森鷗外博士五十五才寫しける」

「二十一日晴。次官大嶋健一に引退の事を言ふ。今から約100年前にあたる大正4年11月、鷗外は日記にこのように書き記しています。35年間つとめた陸軍からの引退を、はじめて正式に表明した日のことでした。鷗外が引退を表明し退官するまでの大正4〜5(1915〜1916)年頃は、鷗外にとって大きな転換期であったと言えます。母・峰子の死、加えて夏目漱石や上田敏等近しい文人との死別、歴史小説から史伝へと移行していった時期でもありました。

鷗外が転換を迎えていたこの時期に、世間ではいったい何が起こっていたのでしょうか。本展示では、日記・書簡・原稿等の鷗外が書き残した資料と共に、当時の新聞記事を展開します。当時の最先端メディアである新聞には、史伝『浪江抽斎』『伊澤蘭軒』等の連載作品や、退官に伴った鷗外自身の進退が、しばしば記事として登場していました。これらを通して、鷗外がどのような時代に生きていたのか、また鷗外が当時の人々の目にはどのように映っていたのかを、感じていただけたら幸いです。本展示は、4月3日(日)まで開催しています。

会期 ● 2016年
2月11日(木・祝) 4月3日(日)
※会期中の休館日
2月22日(月・火)、3月22日(火)
会場 ● 文京区立森鷗外記念館
展示室2
開館時間 ● 10時〜18時
(最終入館は17時30分)
観覧料 ● 一般300円
(20名以上の団体：240円)
※中学生以下無料、障がい者手帳ご提示の方と同伴者1名まで無料。※各種割引がございます。詳細は記念館HPをご覧ください。

関連事業のお知らせ

コレクション期間中に関連講演会を開催しました。

「大正四、五年の森鷗外」

文学者森鷗外が退官を機に、歴史小説作家から、史伝作者へと変貌していった過程を、「傍観者」から「行為者」への転生として捉え、鷗外における「近代」の意味に迫る。

講師 小泉浩一郎氏
(東海大学名誉教授、森鷗外記念会会長)
日時 2016年3月19日(土)
14時〜15時30分
会場 文京区立森鷗外記念館
2階講座室

大正四、五年の森鷗外——転生への渴望——

小泉浩一郎 (東海大学名誉教授、森鷗外記念会会長)

大正四年(一九一五)七月十八日、鷗外は日記に漢詩「七律」『韶祉』を記しているが、その尾聯に「老來殊覺官情薄」の句があった。「官情」とは、官に仕える心の意(『大漢和辞典』)であつてみれば、ここに鷗外の退官への想いを窺いみることは許されるであろう。しかし、そもそも「官情」の「薄」きをもたらしたものは何であつたのか。それを鷗外の「生」あるいは「書」という行為に開く若年時からの「傍観者」としての基本姿勢への訣別の念と「行為者」としての転生への渴望の問題として捉えるのでなければ、鷗外もしくは鷗外史伝における「近代」の問題は、所詮解くことができないのではないだろうか。

現に浪江抽斎の裔孫の追求に先立つ大正四年八月、雑誌『アルス』に発表された短篇小説『余興』は、鷗外における「傍観者」と「行為者」との二律背反性をめぐる興味深い自己批評小説となりえている。翌大正五年一月、『浪江抽斎』に先立って『東京日日』『大阪毎日』紙上に掲載された『相原品』は、伊達騒動を「純客観的に傍観しなくてはならなかった」仙台藩第三代藩主伊達綱宗という強い、受動的傍観者の「心理状態」に対する作者の強い興味を提示しつつ、作品の全構造は、「私は創造力の不足と平生の歴史を尊重する習慣とに妨げられて、此企を放棄してしまつた」(六)という結末部の叙述に向つて急速に収束してゆくという、その激しい逆説性において、「傍観」及び「行為」という課題に対する作者の主体的な自己決定が、決して受動的なそれではなく、まさに積極的な意志の発動に基づく自己決定であつた所以を、この上なく明らかに示していると言えよう。

率直に言つて作品『相原品』は、作者鷗外における「傍観者」の主題に対する積極的な否定的意思の存在証明のために書かれたのである。言い換えれば、作品『相原品』(もしくは或論者が言うように、作品『伊達綱宗』であつても良い)における綱宗、初子、品という「三角関係」の中に「静中の動」を成立させようという「結構」(二)の「抛棄」は、作者が言うような「創造力の不足」や「歴史を尊重する習慣」というような二次的理由による中絶ではなく「なぜなら作者の挙げた二つの条件は、殆どあの歴史小説家としての『歴史其侶と歴史離れ』(『心の花』大四・一)の苦惱の言い換えでしかないのだから、大正四年の下半期から、作者鷗外の内部に徐々に蓄積して来た内発的な強い意志、すなわち「行為者」たるうとする転生への激しい渴望の最初の逆説的表明であつたのである。「調べつつ書く」(平岡敏夫)という鷗外史伝の新しい叙述方法の登場も、そのような「傍観」から「行為」への鷗外の全生活の変革への渴望と正確に呼応する新しい叙述方法の誕生であつた。

こうして、問題は再び鷗外における「行為」及び「傍観」という本質的な主題に回帰するのだが、忌憚なく言つて、それらは、認識と実行、思想と実生活の二元化とその分裂という現代思想の根本的な主題そのものに他ならない。鷗外史伝における「傍観」から「行為」への転生の問題は、まさに大正・昭和における日本の現代の思想的命題に、その仮接統しているのである。

展示のお知らせ

特別展 文の京ゆかりの文化人 顕彰事業

私がおたしであること

——森家の女性たち——

喜美子、志げ、茉莉、杏奴

小金井喜美子、森志げ、森茉莉、小堀杏奴は、それぞれ文豪・森鷗外の妹、妻、娘たちです。彼女たちは当初、鷗外の家族として世間の注目を集めてきましたが、翻訳家や小説家、随筆家としても数々の作品を遺した存在です。

明治を生きた喜美子(翻訳家・小説家)と志げ(小説家)は、女性にとって結婚が生きる手段そのものであつた時代に、妻として家庭を守り、母として子どもを育てるといった役割を担いつつ、文学に関わりました。明治から昭和を生きた茉莉(小説家・随筆家)と杏奴(随筆家)は、女性の在り方が変化していく中で、自身の成長とともに、文学的な才能を豊かに開花させて行きました。



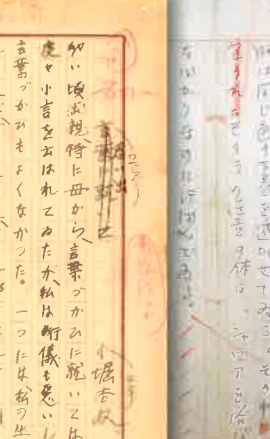
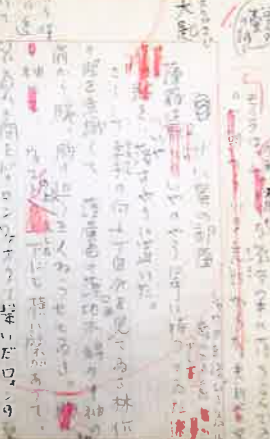
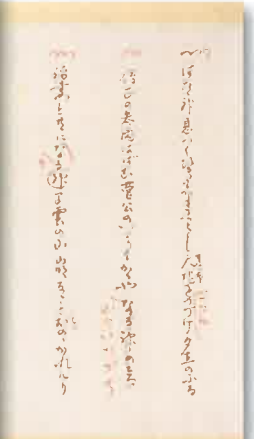
文学活動が希望そのものであつた喜美子、鷗外との葛藤をバネに唯一無比の作品群を遺した志げ、そして、唯美的で濃密な世界を紡いだ茉莉と、明晰さと繊細さをもつて一族を見届けた杏奴——彼女たちの作品は、他人の思惑などどこ吹く風と言わんばかりに、それぞれの感性と倫理観に忠実で、読む者を魅了します。自らの考えや好みを綴る中で、彼女たちは「自分」という唯一無二の存在を作り出していったとも言えるでしょう。

これまで「鷗外という物語」に登場する女性のひとりではなかつた彼女たちですが、今回は4人が主役の物語です。書簡や原稿、遺品など、彼女たちが愛したものと遺した作品を手掛かりに、4人の「わたし」を辿ります。



鷗外から贈られた、茉莉のモザイクの首飾り。世田谷区立世田谷文学館所蔵

〔右から〕
与謝野晶子朱入り喜美子短歌稿 昭和8年
志げ自筆原稿「お嬢さん」 大正元年 鶴見大学図書館蔵
茉莉自筆原稿「甘い蜜の部屋」第一回 昭和42年頃
杏奴自筆原稿「思い出」 昭和28年 鶴見大学図書館蔵



関連事業のお知らせ

特別展期間中に関連講演会を予定しております。申込方法は7頁をご覧ください。

「森茉莉の美の世界」

講師 太田治子氏(作家)
日時 2016年5月22日(日) 14時〜15時30分
料金 無料
定員 50名(事前申込制)
申込締切 5月6日(金)必着

「小堀家の風景」小堀杏奴・四郎を知る」

小堀杏奴と、その夫で画家の四郎。二人の空間を記録したドキュメンタリー映画『信・望・愛』孤高の洋画家小堀四郎90才の肖像』の上映と、監督の伊勢真一氏を迎えてのスペシャルトークです。

講師 伊勢真一氏(ドキュメンタリー映画監督)
金井景子氏(早稲田大学教授)
日時 2016年6月4日(土)
14時〜16時15分(休憩あり)
料金 無料 定員 50名(事前申込制)
申込締切 5月20日(金)必着

ギャラリートーク

展示室にて当館学芸員が展示解説を行います。
2016年4月20日、5月11日、25日、6月8日、22日
いずれも水曜日14時〜(30分程度)
申込不要(展示観覧券が必要です)

活動報告

誕生日記念館講演会「鷗外とロシア文学」実施レポート

鷗外の154回目の誕生日を記念して、「カラマゾフの兄弟」「罪と罰」「悪霊」など一連の新訳で、多くの賞を受賞され、近年のドストエフスキームの立役者となった、ロシア文学者の亀山郁夫氏に鷗外とロシア文学との接点についてお話いただきました。亀山氏の鷗外との出会いは、読んで涙してしまっただけという、太宰治『女の決闘』（鷗外が訳したヘルベルト・オイレンベルクの『女の決闘』をもとに書かれた作品）を通してであったことが語られ、鷗外のロシア文学翻訳作品について話が進んでいきました。1889年から1913年まで鷗外が翻訳した20点の作品と原作が、19世紀から20世紀初頭にかけてのロシアの時代背景（1881年アレクサンダー2世暗殺〜1905年日露戦争敗北以降）とロシア象徴主義等のロシア文学の流れとともに、翻訳作品の中に見出せる鷗外の関心事（美的・唯美的関心事からのロシア象徴主義への興味）「生と死」などの人生の不条理に関する関心、「舞姫」に始まる見捨ての主題、「諦観とファウスト的なヒトリズム」「宗教的テーマへの関心」に沿って紹介されました。

現代語にはない肉感的な翻訳で非常に魅力を感じたことや、他の作家の翻訳よりも良い作品があること、現在はほとんど読まれなくなった作家の作品がある一方でチェーホフは翻訳していないことに関する疑問など、ロシア文学者で翻訳も手がける亀山氏ならではの視点で紹介され、参加者も熱心にメモを取りながら聞いていました。最後に鷗外の未完の作品である『灰燼』とドストエフスキ『悪霊』との共通点や謎、未完のこの作品のその後についても話がおよび、もっと聞いていたいという参加者の想いの中、1時間半の講演が終了しました。



日時：2月11日(木・祝) 14:00～15:30
講師：亀山郁夫氏(名古屋外国語大学学長)

今回の講演を通して、亀山氏は鷗外をとても好きになったそうです。そして、鷗外の翻訳に関する考えが分かる一文「二字一字に訳して、それを排列したからと云つて、それで能事畢ると云ふわけではない。故らに足した語を原文にないと云つて難じたり、わざと除いた語を原文にあると云つて責めたりしても、こつちでは痛痒を感じない」（翻訳に就いて）に翻訳者としての自らの経験を重ね、とても元気づけられた、と締めくくられました。参加者からは「紹介された翻訳作品を読んでみたくなった」という声が多く聞かれました。鷗外が訳したロシア文学の一覧をロシアの時代的背景や文学界の流れとともに見ることで、鷗外年表の中にロシア文学の流れが加わって、新たな視点が見えた講演会でした。

これからの催しもの

催しは◎以外は全て事前申込制です。各申込締切日必着でお申込みください。詳細は、チラシやHPをご覧ください。当館までお問い合わせ下さい。

★応募多数の場合抽選とさせていただきます。
★有料のプログラム参加者はイベント当日にかぎり、展覧会観覧料が免除となります。
★悪天候等やむを得ない事情により、日程・講師・内容を変更する場合があります。

5月21日(土) 11:00～12:30 鷗外講座 応用編 「作品研究1『ぢいさんばあさん』」 講師：倉本幸弘氏(森鷗外記念会常任理事) 会場：講座室 料金：無料 定員：45名 申込締切：5月6日(金)
5月22日(日) 14:00～15:30 展示関連講演会「森茉莉の美の世界」 講師：太田治子氏(作家) 会場：講座室 料金：無料 定員：50名 申込締切：5月6日(金)
5月28日(土) 11:00～12:30 鷗外講座 応用編 「作品研究2『安井夫人』」 講師：倉本幸弘氏(森鷗外記念会常任理事) 会場：講座室 料金：無料 定員：45名 申込締切：5月13日(金)
6月11日(土) 11:00～12:30 鷗外講座 応用編 「鷗外と音楽 1」 講師：瀧井敬子氏(くらしき作陽大学特任教授、音楽学者) 会場：講座室 料金：無料 定員：45名 申込締切：5月27日(金)
6月18日(土) 11:00～12:30 鷗外講座 応用編 「鷗外と音楽 2」 講師：瀧井敬子氏(くらしき作陽大学特任教授、音楽学者) 会場：講座室 料金：無料 定員：45名 申込締切：6月3日(金)

4月24日(日) 14:00～15:30 新・観潮楼歌会 「鷗外とイブセン ―女性をキーワードに―」 講師：稲葉賀恵氏(文学座)×金井景子氏(早稲田大学教授) 会場：講座室 料金：800円 定員：50名 申込締切：4月8日(金)
5月15日(日) 14:00～16:00 朗読会 語り「樋口一葉『にぎりえ』」 講師：横浜ポートシアター 会場：講座室 料金：1500円 定員：50名 申込締切：4月29日(金・祝)
6月3日(金) 19:00～20:30 新・観潮楼歌会「団子坂の日々」 講師：よしもとばな氏(作家)、谷部雄氏(詩人) 会場：講座室 料金：1000円 定員：50名 申込締切：5月19日(木) 作家よしもとばな氏をお迎えし、詩人の谷部雄氏が聞き手となって、多感な日々を過ごした千駄木、団子坂界隈の思い出をお話いただきます。
6月4日(土) 14:00～16:15 スペシャルトーク&上映 「小堀家の風景 ～小堀杏奴・四郎を知る～」 講師：伊勢真一氏(ドキュメンタリー映画監督)、金井景子氏(早稲田大学教授) 会場：講座室 料金：無料 定員：50名 申込締切：5月20日(金)

◆◆文京区立森鷗外記念館イベントの申込方法◆◆

事前申込制のイベントは、各申込締切日までに下記のいずれかの方法でお申込みください。申込みは、1通につき1名様(はがき・Eメールどちらかお一人様1通まで、親子プログラムおよび親子向け推奨のプログラムに関しては親子一組につき1通)、応募者多数の場合は抽選とさせていただきます。申込締切後1週間以内に抽選結果をお知らせします。

- ①**往復はがき** 往信に参加希望プログラム名・日程・氏名(ふりがな)・住所・電話番号を、返信用には、住所・氏名を明記の上、〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 文京区立森鷗外記念館イベント係までご応募ください。 ※日中に連絡が取れる電話番号をご記入ください。
- ②**Eメール** 件名に参加希望プログラム名・日程・本文に氏名(ふりがな)・Eメールアドレス・電話番号を明記の上、bmk-event@moriogai-kinenkan.jpまでご応募ください。 ※参加可否のご連絡をEメールでいたします。当館からのEメールが受信可能なEメールアドレスをご記入ください。受信制限が設定されている場合、当館からのEメールを受け取れないことがありますので、あらかじめご確認のうえ送信ください。 ※日中に連絡が取れる電話番号もしくはEメールアドレスをご記入ください。

〔ご提供いただきました個人情報は、個人情報保護法に基づき適切に管理し、当該プログラム以外の使用はいたしません。〕

「中学生企画千駄木フェスティバル」に参加しました

2月14日(日)のパレンタインデー、森鷗外記念館に隣接する文京区立第八中学校で開催された「中学生企画千駄木フェスティバル」(千駄木フェス)に、当館もパネル展示で参加しました。千駄木フェスは、区立第八中学校と区立文林中学校が合同で企画しているイベントで、隔年それぞれの学校で開催されています。千駄木フェスでは、近隣に住む子どもたちにも楽しんでもらうため、各校の生徒会メンバーが中心となって、ゲームコーナーや食べ物ブース等を企画しています。どのような内容にするのか、11月頃から話し合いを重ね、半日のイベントながら毎年600人前後の来場者があるそうです。今年は、射的やボーリング等に加え、ここ数年の人気企画である食べ物対決が行われました。



食べ物対決は、毎年に定められたメニューを各校で作り、配給の数で勝敗を決めるものです。今年のメニューはうどん! 第八中学校の定番カレーうどんVS文林中学校の具たくさん肉みそうどんの対決となりました。20年近くの歴史のある千駄木フェスで、五分五分の勝負を繰り広げている両校(※食べ物対決は4年前からの企画です)。今年は果たして、どちらが勝つのでしょうか……!(編集後記へ続く)



中学生の定番カレーうどんVS文林中学校の具たくさん肉みそうどんの対決となりました。20年近くの歴史のある千駄木フェスで、五分五分の勝負を繰り広げている両校(※食べ物対決は4年前からの企画です)。今年は果たして、どちらが勝つのでしょうか……!(編集後記へ続く)

カフェ便り

年が明けて世の中が少し落ち着き出す1月19日、森鷗外の誕生日を迎えます。今年モリキネカフェでは、鷗外の154回目の誕生日を記念して、特別なお菓子を販売しました。水天宮にある、ドイツパンの店タナベ特製の、鷗外をイメージしたヒゲ型サブレと、「154th」というメッセージが入ったサブレの2種類を、この日のために用意しました。サブレはドイツでは最も馴染みのある焼き菓子で、サクとした噛み心地と、口に入れた途端ホロホロとくずれるような触感の素朴なお菓子です。今回はブレイン、ココア、レモンの3種類を作りました。ココア、レモンのサブレは、香りがほんのりと口の中に広がり、控えめな甘さの中にしっかりとフレーバーを楽しむことができます。見たためにも可愛らしいサブレは、写真を撮る方も多く見られ、目でも楽しんでいただけたようです。



主な寄贈図書一覧

(2015年1月〜12月)

- 【著者寄贈】
 - 『東京国立博物館研究誌 MUSEUM』No.650 東京国立博物館 2014年6月 *『東京国立博物館所蔵「古賀堂遺稿」と森鷗外』 田良島哲著 収録
 - 堅田智子著『アレクサンダー・フォン・シーベルトと黄禍論』(『上智史学』第57号) 2012年11月(抜刷)
 - 永井良三著『ベルツ賞50周年記念ベルツ博士と日本の医学』日本ヘリガンラインゲルハルト・ベルツ賞事務局 2014年12月
 - 出口智之著『明治中期における口絵・挿絵の諸問題』(『湘南文学』第49号) 2014年11月(抜刷)
 - 出口智之著『高橋太華・雅俗日記』(明治三十五年「翻」と注釈) (一)〜(六)完(『東海大学紀要文学部』第94・95・97・99・101号) 2011年3月、2014年9月(抜刷)
 - 濱口久仁子著『坪内土行宛葉書』(『演劇研究』第38号) 2015年3月(抜刷)
 - 石川博文著『内痔核治療の変遷と英国St Marks 病院(VI)』(『臨床肛門病学』第6巻第1号) 2014年6月(抜刷)
 - 川崎勝著『解説と誤訳』『西周日記』の翻刻をめぐって』(『南山経済研究』第30巻第1号) 2015年6月(抜刷)
 - 奥田万里著『大正文士のサロンを作った男 奥田駒蔵とメイソン・鴻乃集』幻戯書房 2015年5月
 - 上安祥子著『近代公園と公共の思想―上野公園移管と森鷗外』(『白鷗大学論集』第30巻第1号) 2015年9月(抜刷)
 - 高野奈保著『例外の物語―森鷗外「高瀬舟」論』(『立教大学日本学研究所年報』第13号) 2015年8月(抜刷)
- 【発行所寄贈】
 - 『森鷗外 棕鳥通信』中、下巻 池内紀編注 岩波文庫 2015年2、10月
 - 『手紙』筆先にこめた想い、開館八十四周年記念展』天理図書館編 天理大学出版部 2014年10月
 - 『原田先生記念帖』(復刻版) 明治美術学会 2015年3月 * 原田直次郎氏記念会、明治43年1月刊の原寸複製
 - 『悲劇喜劇』第68巻第4号 早川書房 2015年5月 特集Ⅱ「第二回ハヤカワ悲劇喜劇賞」鷗外の怪談
 - 『松本清張研究』第16号 北九州市立松本清張記念館 2015年3月 * 『画像・森鷗外』私考』多田康廣著 収録
 - 『歴史でみる・日本の医師のつくり方』第28回日本医学会総会 医学教育史展「酒井シヅ」ほか編 第28回日本医学会総会 2011年
 - 『森鷗外記念館報 ミュージアム・データ』第19号 森鷗外記念館(津和野町)企画・構成・発行 2015年3月
 - 『佐佐木信綱研究』第4号 佐佐木頼綱編 佐佐木信綱研究会 2015年6月
 - 『津和野百景図』津和野町教育委員会編 松島弘監修 津和野町郷土館 2015年9月(二版改訂版)
 - 『文学と教育』通巻221号 文学教育研究集団編 ころち書房 2014年12月 * 第63回全国集会的記録/〇基調報告 井上ひさしと森鷗外ほか収録
 - 『写真で見る順天堂史 175年の軌跡』順天堂大学 175年史編纂委員会編 順天堂 2014年3月
 - 『森田忠軒資料集 2015』笠間市立図書館 2015年11月
 - 『北里栄三郎』伝染病の征臣は私の使命』北里研究所 北里栄三郎記念室企画・編集 北里研究所 2012年11月

右記の貴重な資料を文京区立森鷗外記念館にご寄贈頂き誠にありがとうございました。鷗外研究のための貴重な資料として、未永く保存・活用させていただきます。

(受入係 ほか)

2016年度前期 文京区立森鷗外記念館 開館カレンダー

4月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

5月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

6月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

7月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

8月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

9月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	

コレクション展「1915-16—100年前の鷗外とその時代」
2月11日(木・祝)～4月3日(日)

特別展「私がわたしであること—森家の女性たち 喜美子、志げ、茉莉、杏奴—」
4月9日(土)～6月26日(日)

コレクション展「鷗外と恋愛」(仮称)
7月1日(金)～9月25日(日)

● 休館日

○ 20時まで開館

編集後記

活動報告(6頁)で紹介した千駄木フェスは、地域の子ども達に校舎を開放することで、入学前から学校に馴染んでもらおうという目的もあるそうです。会場では来場していた子ども達も、当館の展示パネルを指さしながら眺めている姿も見られました。幼い内から鷗外に親しんでもらえるきっかけとなればと思います。ところで、気になるうどん対決は……：第八中学校カレーうどん311杯、文林中学校肉みそうどん284杯という結果になりました！配給数も美味しさも拮抗する接戦でした。

鷗外を通じた地域の結びつきは、文京区内だけに限らず、鷗外生誕の地である島根県津和野町ともさまざまな連携をしています。当館では昨年未より、日本酒「鷗外の郷」の販売を始めました。文京区の小売酒販組合が鷗外生誕150年を記念して発売したもので、島根県津和野町で醸造した純米吟醸酒です。フルーティな香りとスッキリした飲み心地が味わえるとのこと。他ではなかなか購入できないレアなお酒なので、ぜひご来館の記念にお買い求めください。

春は桜やツツジ等、さまざまな花が楽しめる季節。特別展「私がわたしであること」のメインビジュアルも、森家の4人の女性たちから連想した花がモチーフになっています。つつじまつりのあとは、当館で「お花見」してください。



〔写真提供：根津神社〕

交通案内

●電車をご利用の場合

- ・東京メトロ千代田線「千駄木」駅 1番出口 徒歩5分
- ・東京メトロ南北線「本駒込」駅 1番出口 徒歩10分
- ・都営三田線「白山」駅 A3番出口 徒歩15分

●バスをご利用の場合

- ・都バス 草63番系統「千駄木一丁目」下車 徒歩1分
 - ・都バス 上58番系統「団子坂下」下車 徒歩5分
 - ・B-ぐる千駄木・駒込ルート「18特別介護老人ホーム千駄木の郷」下車 徒歩5分
- ※一般の駐車場がございませんので、公共交通機関をご利用ください

〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 TEL: 03-3824-5511
URL: <http://moriogai-kinenkan.jp>



文京区立
森鷗外記念館
Mori Ogai Memorial Museum

開館時間 10:00～18:00 (最終入館は17:30)

休館日 毎月第4火曜日(祝日の場合は開館、その他例外あり)、
年末年始(12月29日～1月3日)、及び展示替期間、煙蒸期間等